

# もど子と人婦

號六第卷四第

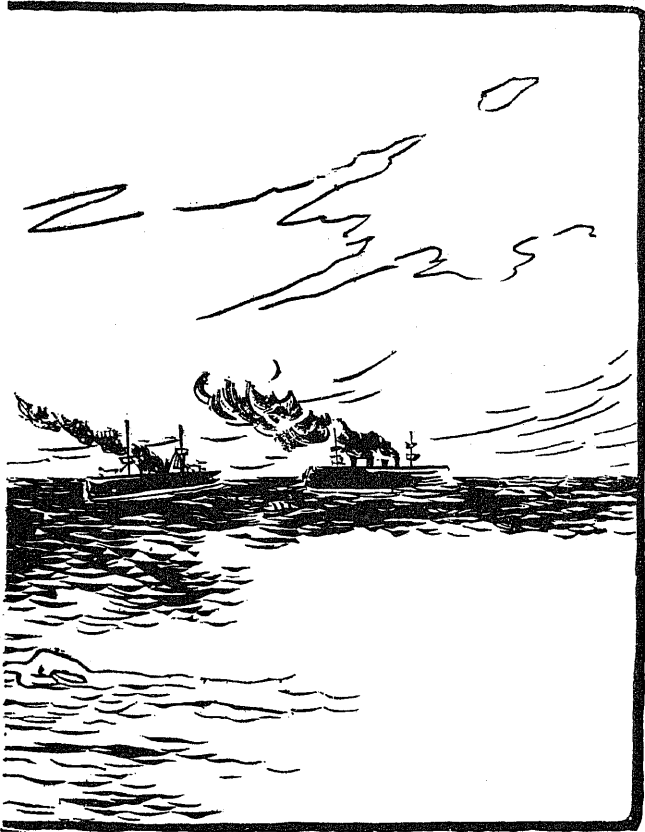
金州丸

やまとの翁

小石川の金華高等小學校では、  
毎週、金曜日の午後、校長さ  
んの講堂修身のお話があること  
に決つて居ます

今日は、五月の始めの金曜日、

今しも、午後一時の鐘がなりましたので、高等科の生徒は、皆一齊に整列して、夫れく受け持ちの先生方の號令に従つて、規律正しく二列になつて、順次に講堂に入り、堂に入りました。講堂の正面には、此程名譽

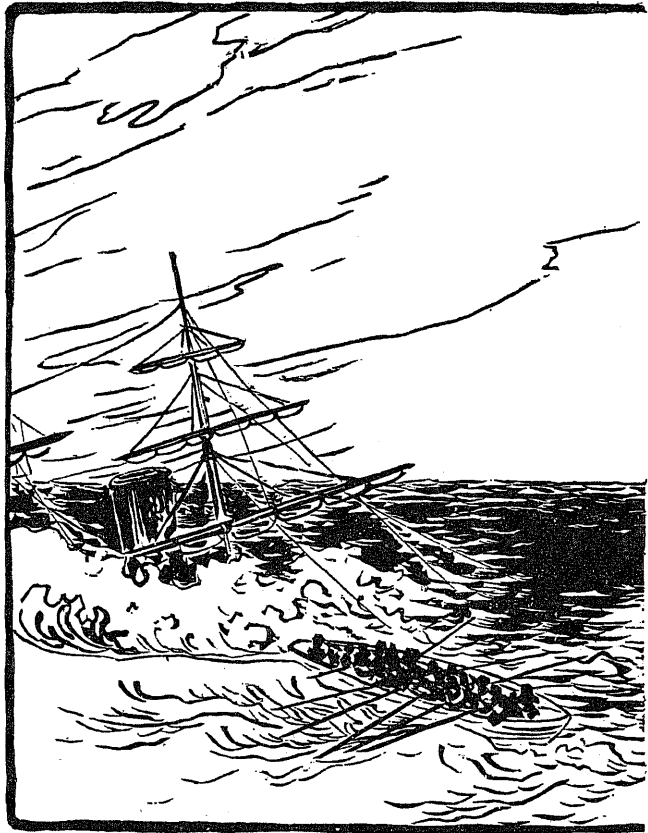


の戦死に其名を轟かせた廣瀬鬼中佐の肖像と、其横側に日本朝鮮、満州地方の地

圖が掛か  
つて居り  
ます。や  
がて、生  
徒が残ら  
ず席に着  
きました  
頃、校長  
は静かに、

口調で、次の様に話しました。

校長は極めて沈着いた、重々しい、併も明瞭した



此處に這  
入って來  
て、教壇  
に上りま  
すと、生  
徒一同は  
一齊に起  
立して、  
丁寧に敬

「皆さん、今度の日露戦争は、世界歴史中の最大事件でござり  
 ます。夫のみならず、皆さんを教育する上から、否な吾々日  
 本國民全體の道德教育の上から見ても、實に古今に比類のない實  
 例を、澤山に吾々の眼前に供せられました。前週の日曜日には  
 私は、茲にかゝって居る廣瀨中佐……日本武士の好標本とも稱す  
 べき廣瀨中佐の忠勇につきてお話を致しました。今日は、大方  
 皆さんも、新聞紙で御覽になったり、お家でお聞になったでし  
 よう、あの元山津沖で、敵艦に出遭つて、不幸の最後を遂げた  
 我が金州丸のお話を致したいと考へます。

一體この金州丸と申すのは、軍艦ではありません、たゞの商船  
 でありまして、日本郵船會社の所有船に屬し、噸數は三千八百五

十三噸、長さが三百六十呎からありまして、去る明治二十三年十二月英國で出来上った船でございます。郵船會社の船の中なかでも、一番速力の速い船でありましたものですから、今度の戦争せん争の起るに當りまして、眞先まゝき駈けて海軍御用船の任務に當ったのであります。

時は先月の二十五日、韓國元山津守備の陸軍某聯隊に於きましては、其北方利原といふ地方の敵狀を視察の爲め、一個中隊を此方面に派遣する事になりました。そこで、我が金州丸はこの陸兵を搭載し、水雷艇隊に掩護せられて、其日の午前六時といふに、勇ましくも元山を拔錨し午後二時には、早くも目的地に着しましたから、陸兵はやがてこゝに上陸し、各方面に分れて

偵察をなし、有力なる任務を全うして、皆々無事に歸船しました。六  
 たから、午後六時、やがて、其處を拔錨して歸航の途につきま  
 した。

然るに船の進航するに従ひて、天候漸く險惡となり、墨を流せ  
 る如き密雲は低くして走る事頗る急に、舷を洗ふ波さへ俄に轟  
 やとしてすさまじく、荒ぶるといふ風で何さま頗る不穩の状  
 況となりましたから、是非なく、掩護の任に當って居った水雷  
 艇隊は、遠湖島といふ島に風波を避けて、こゝに一夜を過すこ  
 とに決めまして、勇敢なる、金州丸は、こゝに單獨に、元山津  
 へ歸航することになりました。

時刻も既に其日の十二時頃、際涯もなき日本海の眞中に、風波

を蹴つて進航し來つた我が金州丸は、丁度、新埔の沖合凡そ二十哩の邊りに當つて、遙に數點の燈火を見ましたが、それが、我が艦隊が、二十三日からかけて、浦鹽方面に向つた留守中、元山津に入り來り、そこに碇泊して居つた、我が商船五洋丸を撃沈して去つた所の有力なる敵の浦鹽艦隊ならんとは、遙の遠方併も夜中の事とて、さすがの金州丸でも、とても見分けが付かなかつたでしよう。

暫くすると、敵艦隊、ロシア、グロンボーイ、リユーリックの三艦は二隻の水雷艇を引き連れて、金州丸に接近し來まして、いきなり一發の空砲を發し、つゞいて止れの號砲を發しました、何しろ、彼は有力なる三隻の戰艦に二隻の水雷艇、我はこれたゞ

一の商船、とても敵する事は出来ないものであるから、船長八木政吉氏は、言ふがまゝに船の進行を停止しました。かくと見て敵艦ロシア號からは、數人の士官一隻の短艇に乗て金州丸に漕ぎ付けまして、八木船長と何事か問答の末、船長と他に監督將校溝口海軍少佐及び飯田大主計の三人は若干の水兵ともに我短艇に乗つて敵艦ロシア號に乗り移つて仕舞つたが、どうしたのか、夫つきり何の音信も來らない。

此時までも、我が勇敢なる陸兵一隊は、上官の命令に因つて慌てず騒かず肅然として静まり返つて、船内に潜んで居りました。が、一船の運命を托する船長始め、監督將校が、敵艦に乗り移つて、仕舞つた切り、歸船しないとなつては、如何に決死の覺悟



の軍人とはいへ、敵の砲臺を乗っ取り、敵の銃鎗の下に命を落す陸軍の身の計らずも、渺茫たる海上の眞中には、敢なき水屑となるかと思へば、當時此勇士の面々の胸中には、悲痛慘愴の極みとも申しましようか、其無念さ、残念さは、とても筆にも言葉にも盡されなかつたらうと思ひます。

暫くしますと、ロシア號からは、又々一名の士官と二名の水兵とが短艇を押し來つて進んで來まして、この度は、金州丸の船室を始め、船内一々子細に點檢しました末、遂に我が武裝せる一隊の陸兵を發見しまして、大層驚いた風で、忽ち本船へ引き返しました。

然し、敵艦からは、兎に角一時間の猶豫を與へるといふ事なの

ですから、其間に船員は、各自短艇に乗ってロシア號を見かけて漕ぎ付けました。が、併し、我が大膽なる一隊の陸軍將士は肅然として少しも騒ぎません。

『吾々は、此船と運命を共にするのだ』

何たる勇ましい言葉でしょう、椎名中隊長を始め櫻井大尉、寺田中尉、横田中尉、檜桓少尉、鷲曹長、岡野曹長等の人々は決然として、最後の手段を講じました。中隊長は慨然として一同に向ひ。

『諸君！金州丸が最期の時期に迫ったと同時に、愈々吾々の最後の時間も迫りました。身は陸軍の軍職を奉じ敵の馬前に死すべき身の空しく、こゝ、洋中の藻屑となり果つるは、聊か残念

であるとは申せ、君國の爲敵前に死するは一つなり。忠勇なる諸君、願くは潔く覺悟を決せられよ、覺悟を決して、陛下の萬歳を祝し奉りて此船と共に沈まん』

耳を澄せば、舷を洗ふ波の音ばかり、深夜の寂寞を破つて、響き渡れる大尉の演説は、更に一層の悲壯を増して、一隊の勇士の感慨は、更に如何ばかりか、深かったでせう。

夫では、何れも最後の用意をしよう、といふので、皆々懐にせし地圖を引き裂きすてるやら、第何聯隊といふ肩章を引きちぎって仕舞ふやら、俄かに、號令をかけて、隊を整へるやらして居る中に、はや一時間は過ぎ去つたものと見えて、敵艦から發射した魚形水雷は、見事、我が金州丸に命中したのか、爆然た

る響ひびきと共に見みるく、船せん體たいは眞まこと二ふたつとなり、潮水うしほは滔と々ととして

甲板かんばんを洗あらす

ひ始めま

した。

『もう、

是迄これまだ』

と叫こゝろんだ

中隊長ちゆうたいちやうは、

怒氣どき満面まんめん

に溢あふれて、

『睨にらえ』



十二

\* 『打うちてっ』

との號令ごうれい

の下もとに、

一隊いちたいの兵へい

士しは端然たんぜん

として、

ロシア號ろしあごう

目めかけて

一齊射擊いっさいしやく

を行やった、

しかも水

は次第々

々に嵩を

増しては

や、一隊

の膝を没

するまで

となり、

は、軍刀引き抜き、

かくと見た士官兵卒の誰れ彼れ、

ひながら一、

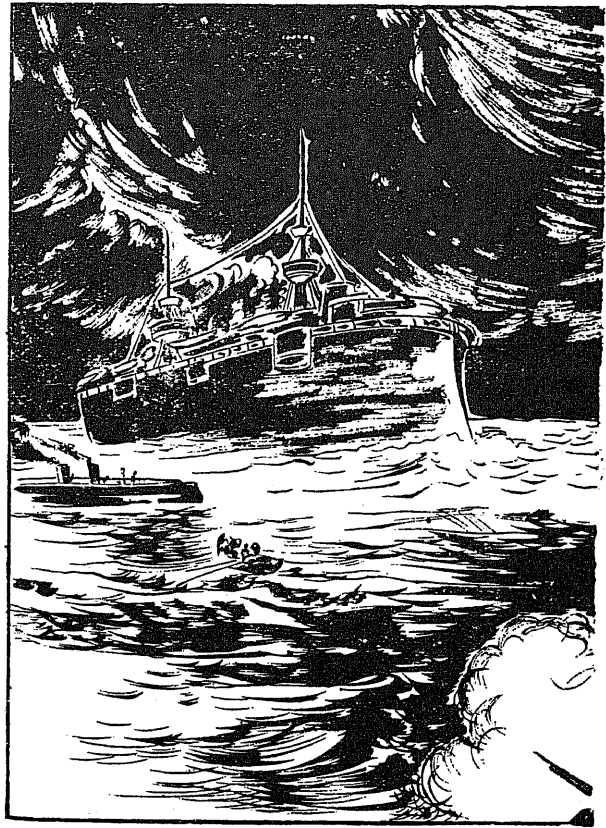
二、

三、

の、掛け聲で、

ズドンと一發、

潮風に高く



敵艦から

は、絶え

ず大砲を

打ち出し

て来る、

そこで氣

早の曹長

岡野茂逸

胸に宛てが

切腹した、

物の見事に

響かせると同時に、枕を并べて打ち斃れた、残る面々は「なあに、生命の限り、根限り、一發でも敵にくれてやらんければ」といふので、潮水の肩を浸すまで、兩手を高く上げては打つて居ましたが、間もなく敵から發した水雷一發、ズドンと響くや、船も人も大空遙に吹き上げられたが、「大日本帝國萬歲」の聲は、空中遙かに響き渡った。夫と同時に、我が金州丸は、全く姿を海中に没し去りました。此時は、丁度二十六日の午前二時近くでありました。

然し、此騒ぎの最中に於きまして、乗り込みの人夫や商人と夫から、陸兵の少しとは、短艇に乗り込んで、辛との事で敵艦に見付からない様にして、沖に漕ぎ出でましたが、非常な困苦を

冒した末、遂に馬養島に漂着して、そこから、無事新埔へ歸着したので、夫からして詳しい金州丸の事情が判然事になったのであります。

さて、一方に於ては、彼の金州丸掩護の任務に當つた水雷艇隊は、天候險惡のため、金州丸と分れて、一夜を遠湖島に明し、翌廿六日に至つて、そこを抜錨して元山津に引き返して來た所が、疾づくに歸つてなくてはならぬ金州丸は未だに歸つて居らぬ。のみならず、茲に浣泊して居つた商船五洋丸は無殘にも、港内に於て敵艦のために撃沈せられて居るといふ有様、指を屈して見ると、金州丸は歸航の途次、正しくこの敵艦に出遭つて居らねばならぬ。さては、不運にも五洋丸と同じ運命に遭つたの

ではあるまいか、もしさうとすれば、之に乗って居た、陸兵の一隊は、あはれ、船と共に沈んだか、夫とも、むぎく、捕虜となつたかに違ない。夫とも、甘く切り抜けて、陸地近くに乗り上げて、人だけは助かつたであらうか、何しろ、たゞ事ではな  
いといふ所から、上村○艦隊司令長官は、直ちに、金州丸捜索の任務を以て○隻の軍艦を派遣し、元山から浦鹽に至る沿岸  
一帯の海上を殘る限なく搜索させましたが、其中の一艦か、金州丸乗込員の遺物とも見られる品の這入って居る主なき一隻の  
傳馬船の波のまに、く漂流して居たのを発見した切り、遂に我が  
金州丸の消息は、沓として知れなかつたといふ事です。  
皆さん、我が金州丸の不幸の災難の次第は、實に此通りであり



ます、之れに乗り込んで居られた、一隊の陸軍の方々に向つては、我が日本國民は何れも深き同情の涙を注がぬ者はありませぬが、夫と同時に、之等の陸兵の健氣なる行爲は、實に日本武士の精華とも申すべきでありまして、大なる感化を國民に與へました。されば鴨綠江畔に居られた我が陸軍の士氣は此變災を聞きまして非常に奮激したと申す事でありませぬ。

嗚呼、皆さん、かように我が金州丸は、忠勇なる幾多の兵士を載せたまふ、渺茫たる北海の水底深く沈んで仕舞ひましたが、併し、彼の勇士たちの忠魂義膽は船と共に朽ち果てないで、いつくまでも、我國の護りとなるでありますよう』